

間の面とわたしたちが名付けているものは、決して出来上がったものではありません。人間の面においても目に見える目鼻立ちなどはいわば一番外側の層でしかありません。外的な目鼻立ちから深層へと入っていくのです。すなわち、内的な形態、姿かたちへ、霊の刻印へと、心情の明晰性と断固たる堅固さへと、心の親密さへと。人間は普段は仮面ぐらいしか着けていないのが普通です。面がどれほど生き生きしたものとなりうるかということは、たとえば、或る人間の心を捉えている会話の推移の中で、あるいは或る人に深い感動を与えている出会いの進行の中で、その人の本当の顔が突如として自己を覗かせ、今こそ初めて、その人の本当の顔が内側から出来上がってきているかのような印象を受ける際などに、経験することのできることです。このようなことはみな自然的な事柄ですが、神的な事柄を指し示しているものではありません。神の前において一人前に扱って貰えるだけの面輪を人間は自分からはまだ全く持っていません。そのような面はあの方の主導で初めて成立していくものなのです。あの方に話し掛けているなかで初めて、わたしはまともに或る何者かに——あの方がわたしを創造され救済された時に指し、念頭に置いておられたあのわたし自身に——なっていくのです。この面は祈りの中で初めて、形成され、展開し、確固としたものになっていくのです。

外的な秩序

ここまでのところで話題になっていたのは、祈りの実践、練習ということでしたが、これを話

題にするからには、やはりどうしても、祈りにおける秩序、規律についても話さねばならないであります。それももちろん、内的な秩序、すなわち、霊的な行いや状態の骨格ということについてです。それは、このような骨組が根底にないかぎり、意味のある実践は可能ではないからです。けれども、わたしたちは今はまだ、秩序という言葉でまず最初に念頭に浮かんでくるものの、即ち、外的な秩序について話をしなければなりません。ところで、個々の細部にまで立ち入る決心がないのなら、このような話をすることは意味がないのですが、「他方では」細部にまで立ち入る場合には、小事に拘ったり、差し出がましくなったりする危険もあります。ですから、わたしたちは正しい節度を保つように努めたいと思います。したがって、以下で述べることをどのように応用するかは、読者の方々の事柄ということになります。

ここでまず問題になるのは、何よりも時間の秩序です。この秩序の基礎は、人間の行動と内的な生命事象双方のリズムでもある光のリズムにあります。すなわち、昼と夜、労働のための週日と日曜日、四季折々の節目をもった一年といったリズムに基づく秩序です。そして、この秩序が祈りにおいてもその力を發揮してこななければならないのです。

一日は朝をもって新たになり、夕べをもって閉じます。朝毎にその都度、そこには生涯全体の始まりであつた誕生の余韻が響いていますし、夕べには最後の終末である死の草稿が前もって認められます。この両者のあいだに置かれているのは労働と闘争、業と定め、成長、豊穰、そして危難です。この一切が朝の祈りと夕べの祈りの中で表現されることになります。^(原注3)これら二つの祈

りが欠落するとき、その一日は荒廃したものとなります。

月の動きのリズム、つまり一ヵ月から、そして同時にこれは労働と休息といった生物学的緊張の移り替わりからでもあるのですが、一週間というものが生まれてきます。週のうち六日は労働のため、一日は休息のためと決められています。労働の日々には人間は勤務に就き、七番目の日には自由になります。これが一週間の生活の存在本質的な法であり、人間と星晨とを創造されたあの方によって与えられているものです。あの方は七番目の日についてのこの自然法を主日という霊的宗教的掟と結び付けられました。啓示は、六つの日々で神は創造の業を完結され、七番目の日には休息されたと述べています〔創一・一二・一〕。ですから、七番目のこの日の背後には神の休息という秘密が控えています。日曜日という日の本来の意味での中心的な事柄は、人間の休息ではなく、神のあの休息です。そして、人間の休息は神の休息に基礎を置くとき、初めてその深みを受け取ります。神の休息に由来するこの深みに対して人間は心を開く筈なのです——ちょうど、人間の労働が世界に向けられた神の業に奉仕することであり、神の業から初めてその本来の意味を受け取っていると全く同じように。神の休息の秘密には更にもう一つの秘密が加わって来ます。すなわち、キリストのご復活の秘密です。ご復活が主日に救済の勝利を喜ぶ凱歌と、新たな創造の開始という意識を持ち込んでいます。ご復活の光が復活の祝日を満たし、そしてこの祝日から更に一つひとつの日曜日のいずれをも満たしていつています。^(原注)ですから、日曜日は主の日であり、そしてまさにそのことをもって、人間の日でもあるのです。日曜日のこのような意味はかなりのところまで失われてしまっています。近代の過程の中で、特定の内容を持っ

いないお祝いの日と、そして最終的には単なる休養と娯楽のチャンスとなってしまうかもしれません。日曜日の本質に対する感覚を日に日に喪失していく周囲世界にあって、日曜日を正しく——真剣に、ただし、狭隘きょうがいさや強制はなしに、世界の創造者にして救済者である方への帰依の日として、と同時に神の両眼の前における喜びの日としても——形態付けていくことができるためには、どのようにしたらよいのか、この点について一般的に述べることはできません。いずれにしても、ここには一人ひとりに関わるひとつの課題が置かれています。この課題を外側から解決することはできません。それは、潜心し、日曜日の秘密に深く沈潜していくなかで、この日が自然的、靈的宗教的生命の最内奥の本質とどれほど深く関わり合っているかを理解し、この日の美しさに対して心を開き、その上で、自分自身の生活においても家庭生活においてもその美しさのための空間を作り上げるために何をすることができるかと問うことによって、内側から解決することしかできないことです。ここでの事柄の中心が何なのかが分かっている度合に應じて、その実行のために求められる出費にも耐えることができるでありましょう……。ただし、さらに、日曜日のために土曜日がどれほど大切かということにも注意を喚起しておくのがよいと思われます。教会的見解によると、一日が始まるのは前日の夕暮からということになっていますが、これは当然のことでもあります。一日は目覚めをもって始まるのですが、「目覚めの前提である」眠りを規定しているのは、眠りに直接先行しているものです。従って、もしわたしたちが日曜日を新たに獲得し直したいと思うなら、わたしたちは日曜日が「新たな目覚めに備えて」「憩い」に入るとき、すなわち土曜日の夕暮をもって始めねばならないのです。

過ぎ去るということの一番包括的な形態は四季折々の節目を伴った一年にあります。一年は月、週、日を総括しています。そして、生命の目覚め、開花、結実、そして没落（という過程）にも似た仕方で、太陽の光の移り変わりによって規定されてもいます。このことの宗教的表現を形成しているのが、キリストの生涯のいくつかの出来事を太陽の一年と生活の一年の進行に結びつけている、教会の典礼の一年です。こうして、主の生涯についての追憶が絶えず新たにされ、救済を共に体験することなく繰り返されていくのです。待降節、そして主のご降誕とご公現の時期、さらには四旬節から復活節、そしてその後にくる聖霊降臨節。最後に、歴史の、そしてキリスト再臨の期待の永い時を表現しているその後の週々、すなわち、最後の審判について語っている、教会の一年のあの最後の日曜日までの週々が来ます。心情はこのそれぞれの時期にどれほど深く、しかもそのそれぞれからどれほど異なった感銘を受けていっていることでしょうか。この感銘が一人ひとりの人の個人的人格的、宗教生活の中でも効果を現すようにならねばならない筈なのです。以前は確かに家庭においても、教会暦に合わせて家庭で読むように区切られた聖書の一節を読んだものでした。それによって、救済と関わりのある重大な出来事や人物たちの姿が個人的人格的な生活の中に入ってきていました。今日ではこの繋がりは相当のところでまで解体してしまいました。そして、あの繋がりをもう一度獲得しなおすことはひとつの重要な課題となっています。典礼とともに生きること、適切な書物の朗読、一家の仕来たりで意味のある形態を与えられているあれこれのものが、ここでは多くの働きをすることができますし、一個の人格としてひとりでする祈りのためにも、移り替わっていく色彩と、絶えず新たな内容と

を与えることができます。

秩序を構成する第二の要素は、組織的に区分されているとともに統一性を持ってもある外的空間です。

ここでもわたしたちは、ずっと以前から進行している崩壊を数に入れねばなりません。人間が生活している空間は以前は信仰によって形を与えられていました。その時代の生活単位としての地域共同体を例にとってみるなら、共同体の中心点は教会でした。一家の憩いの場でもあり仕事場でもあった家々は教会を囲むようにして配置されていました。そして、生産生活のための空間である畑や牧草地、林や森がありました。両者の間には、区分点が散りばめられてでもいるかのようにして、墓地やチャペル、路傍の十字架や、その他の聖画像などが配されていました。家屋は祝別され、様々なキリスト教的象徴を着けていたものです。部屋の中には十字架があり、この十字架に向かって祈りがなされていました……。こういった秩序はかなりのところまで崩壊してしまいました。客観的にキリスト教的な形を与えられている空間はもはや存在せず、そのような空間は、信仰している人間が絶えず改めて築き上げていかねばならないものとなっています。ただし、この点に関しては、個々の人の生きている状況が違いすぎますので、ここで一般的なことを述べることはあまりできません。

何にもましてまず、一人ひとりの信徒にとって教会が新たな仕方でも重要なものとならねばならないであります。それも、いまここでは問題にしていらない共同体全体の敬神祭儀のための場

所という意味においてだけでなく、郷土権とも言われている居住権をどの信徒もがそこでは持っている、父の家という意味においてです。この居住権という意識は信徒の誰もが自分の中で作り上げねばならない筈のものです。つまり、誰もが日々の道の途上で折に触れて教会の中に踏み入り、そこで落ち着きと、こころの統一、内的解放、慰めと、勇氣、元氣付けを求め探さねばならない筈なのです。^(原注5)

これよりも難しくなるのが、聖なる場所という考えを自分の家の中で実効的なものにする事です——空間が極めて限られたものであったり、家族の中の他のメンバーが無関心、ないしは否定的な態度をとる場合などは特にそうです。それでも、一つ二つのことはもしかしたら可能であるかもしれません。たとえば、部屋の一隅に十字架が懸かっている、その近くに席を取ることができる、というようなこともあるかもしれません。あるいは、一方の壁に画像があるなら、畏敬の念をもってそちらを向いていられるような席に着くこともできます。聖なる画像は、思い起こすため、眼の前に表象してみるためだけのものではなく、そのようなもの以上のものです。画像自体は確かにキリストご自身でも、主の母でも、救済史における或る偉大な人物でもありません。ここではわたしたちは決していかなる幻想主義にも陥らないようにしたいとは思っています。けれども、画像というものは単なる印やヒント以上のものです。そしてこの、以上である部分が一家の生活において、注意を促し、警告を与え、秩序を整えるひとつの力になることができるのです。^(原注6)

十字架に向かって皆で祈りをすることもできますし、花を飾って十字架に敬意を表すとか、その他様々な似たようなことをすることもできます。

「そうは言っても、このようなことをする際に、それが遊びごとになってしまったり、他の人々への配慮を忘れたものとなってはなりません。正しいこと、美しいことと思っていることをするのはよいことですが、不必要に目立つことや、他の人々を当惑させることはよくありません。世界は神のもので、そして世界の小さな写し絵であるこの家もあの方のもので、したがって、この家の中でも神の支配が表現されること、神の支配が見える形をとることができる場所を得ることは「相応しく、かつ正しいこと」〔ミサ奉献文への叙唱〕から〕ではあります。けれども、本来の意味での「キリスト教的な場所」とは固定された〔物理的〕箇所ではなく、人間との間に神が持たれる生き生きとした間柄にもとづいて毎回その都度成立してくるものです。それは現存在の場所であり、神が愛のうちにその心を人間に向け、ご自身の摂理の進行を通して人間に呼び掛けておられるなかで、あの方が人間に対して開いてくださっているものなのです。他方、呼び掛けられている人は自らの信仰をもって、自らの帰依心をもって、自らの服従をもって答えます。この答えがあつた「はい、わたしはここにいます」〔サム上三・四〕であり、この言葉を通してその人はその聖なる場所に近づいて行くのです——そして、これは人間がどこにいても、とても場所とは言えないような極度に不快な外的環境の中においても、実行することのできるようなのです。

秩序の第三の契機は生活における日常のあらゆる出来事そのものです。かつては、それらの出来事はすべて、意味のある仕来たりという形に表現されていた或る宗教的な意義付けで満ちてい